



バーチャルなつながりを新たな地域の絆に

—小樽の隠れた魅力を発信するプロジェクトから見えてきたこと— (後編)

小樽商科大学・社会情報学科

佐山 公一

前編では、小樽の隠れた魅力、潜在的な観光情報を『おたるくらし』フェイスブック (FB) ページ (<https://facebook.com/OtaruClass>) およびホームページ (<http://otaru-class.com/>) から発信するプロジェクトの概要を、プロジェクトを始めた動機やいきさつから説明させていただいた。強いふるさと意識を持っている小樽の方々であればこそ、そうしたバーチャルコミュニティをうまく維持発展できることにも触れた。『おたるくらし』FBページを運営し2年が経過した。小樽での滞在時間を増やし、運河沿いを出て小樽中を歩きまわり、小樽市民とコミュニケーションをとってもらえるようにすることがプロジェクトの当初の目的であった。後編では、現在の活動、実際に運営してみて分かったこと、当初の目的にどのようにつなげていこうとしているかなどを、将来的な展望も含め、説明してみたい。

◎『おたるくらし』フェイスブックページの他のFBページとの差別化

無数のFBページがあり、読まれているページもあれば読まれていないページもある。そんな中において『おたるくらし』FBページは異彩を放っている。2015年6月9日現在、7774のページへのいいね! (“定期購読者”の数)を獲得している。1地域のコミュニティページとしては比較的大きい。話題にしている人の数(過去7日間に、記事にコメントしたり、記事にいいねを押したり、シェアしたりしてくれた人の数)もきわめて多い(6月9日時点で2022)。記事のシェアの数が、他の観光目的の小樽のFBページに比べて多いので、運営側がとくに何もなくてもページへのいいねの数が増え読者が増える状況になっている。

◎おたるくらし中国語繁体字版:

『小樽生活中文』フェイスブックページ

2014年4月から、台湾と香港のFBユーザに向け中国語繁体字版『小樽生活中文』FBページ (<https://facebook.com/OtaruClass.tw>) とホームページ (<http://otaru-class.com/tw/>) をスタートさせた。日本語版の記事を翻訳し中国語の記事にしているが、旅行ガイド本の記事とは異なり、もともとの日本語の記事が、思い入れのこもった主観的な文章である。小樽や北海道の現況を熟知していて、翻訳経験も豊富な方に、意識をしたり背景説明をつけ加えたりして自然な中国語になるよう工夫をして

もらっている。

◎Web上でアンケート調査を行って、誰にどのように読んでもらっているかを知る

FBページの読者の属性情報(インサイト)を見ると『おたるくらし』は40, 50代男性がメインであるのに対し、『小樽生活中文』は20代女性がメインなのが分かる。

2014年3月に『おたるくらし』FBページの“定期購読者”にFBページ上で呼びかけ、Webアンケートに協力してもらった。また、同年4月、『小樽生活中文』FB/HPページを始めたときに、台湾の大学の教職員と学生に依頼し『小樽生活中文』FBページの記事を読んでアンケートに答えてもらった。分析の結果、『おたるくらし』は、小樽市民と同じ強いふるさと意識を持った方が読んでいるのに対し、『小樽生活中文』は、(多くは過去に訪問経験のある)小樽好きの方が詳しい小樽の観光ガイドとして読んでいることが分かった。

◎小樽観光バーチャルツアーマップ:

家ではパソコン、小樽に来たらスマホで

日本や外国の方もスマホを見ながら小樽観光をする、というのがよくある運河沿いの光景になっている。そこで『おたるくらし』ホームページに、小樽観光バーチャルツアーマップ (<http://otaru-class.com/map/>) を現在構築している。マップ上のアイコンをクリックすると『おたるくらし』の写真と文章が現れる。小樽に来る前に、小樽観光をゲーム感覚でシミュレーションする。小樽に来たらその場で小樽の情報を確認しながら観光してもらう。

◎市民の力で小樽を活気あふれる街に

ふるさと意識が強く小樽に思い入れを持っている小樽内外の方たちに先導していただき、ご家族や友人を小樽に連れてきていただく。同伴で小樽に来た方たちも小樽を気に入りリピーターになり彼らがさらに友人を連れてくる。こんな状況を作り出そうと、本プロジェクトは目論んでいる。高齢化と人口減少が著しい小樽を活気あふれる街にするには、バーチャルコミュニティを利用するのが最善と筆者は思っている。シニアの小樽市民が誇りをもって小樽を、FBページ上であるいは実際に小樽で観光客に紹介する。外から小樽にやってきた人は、ノスタルジーあふれる小樽での体験を、自分の人生に重ねあわせる。この過程で生まれるバーチャルなつながりが新たな地域の絆になる。